

カサノヴァの見た十八世紀のワルシャワ

金沢 美知子

「ポーランド国王は中肉中背だが、容姿端麗であった。容貌は格別美しくはなかったが、格別品があり、才気ばしっていて、表情にとんでいた。少し目が近く、ものをいわないときには、顔に少し憂鬱そうな影がさしたが、ものをいい出すと、その反対に活気づき、顔を輝かして雄弁にしゃべった。彼はまた話によってはかならず上品な冗談をまじえる才能をもっていた」

これは、1764年に国王の座についてまだ間もないスタニスワフ・アウグスト・ポニャトフスキ（ポーランド・リトアニア共和国最後の国王、在位 1764-95）についての印象を綴った文章で、稀代の詐欺師にして放蕩者、ジャコモ・カサノヴァ（Casanova, Giovanni Giacomo 1725-98）が晩年に記した自伝的回想録（*Histoire de Ma Vie*）の一節である（引用は田辺貞之介訳『カザノヴァ回想録』集英社、1973より）。

カサノヴァは1725年、イタリア、フィレンツェに貴族の婚外子として生まれ、当時のボヘミアのデュックス（Dux、現チェコ・ドゥブツォフ Duchcov）において73歳で生涯を終えるまで、数多くのパトロンの間を渡り歩いた。「ペテン師」「女誑し」と呼ばれることも多いが、16歳で法学博士となったほか、哲学、数学、薬学に通じ、種々の職業についての経験をもつ教養人でもある。彼が訪問する先々で上流社会に出入りを許され、君主やその縁者、友人達から厚遇されたのは、幅広い知識とそれを巧みに社交に活かす話術によるところが大きかった。

カサノヴァという人物は様々な顔をもっているが、最大の特徴は、彼が18世紀という時代に典型的な国際人、すなわちフランス語を主な意思疎通の手段として諸国を渡り歩いたヨーロッパのコスモポリタンだった点にある。彼は遍歴に生涯を捧げただけでなく、訪問地の人間関係に深く入り込んで、賭博と恋愛に時を過ごしながらか、その地の君主とも親交を結んだ。異国の文化を観察し、同時に享受したのである。そのカサノヴァのヨーロッパ遍歴の中でもとりわけ注目されるものの一つが、1765年秋から1年半ほどの間のワルシャワ滞在であった。

カサノヴァは1764～65年にかけてロシアの、主としてペテルブル

クを訪問している。おりしもヨーロッパでは1763年に七年戦争が様々な問題を残しつつも一応の収束を見、旅にとって比較的都合のよい環境が整い始めていた。彼のペテルブルクへの往路は、まずポツダムから、バルト海に沿ってダンツィヒ（現ポーランド・グダニスク）、ケーニヒスベルク（現ロシア・カリニングラード）を経て、リガで逗留後、ペテルブルクに入るというコースであった。

ワルシャワ逗留は復路である。カサノヴァはロシアからの帰途、ケーニヒスベルクで自分の馬車を売却し、ワルシャワ行き馬車の席を買った。同乗者は皆ポーランド人で、ポーランド語とドイツ語しか話さなかったせいもあり、退屈な旅だったようだ。

1765年10月末、ワルシャワに到着するとすぐ彼は社交界に乗り出す。カサノヴァの基本的な行動パターンは紹介状を利用して訪問地の社交界に入り込むことで、彼はまず紹介状をもってアダム・ツァルトリスキ大公を表敬訪問し夕食への招待をとりつけた。次にスルコフスキ大公宅へやはり紹介状を持参し4時に改めて来るよう招待を受け、その足で貿易商シェンピンスキを訪ねて金子を調達し、時間つぶしに劇場でオペラの稽古を鑑賞している。

そしてその日の午後、約束通り彼はまずスルコフスキ大公のもとで4時間を過ごし、9時頃アダム大公の邸に出かけた。大公は邸に集まっていたポーランドの名士達に彼を引き合わせた。そこへひとりの品格ある人物が登場する。大公はそれまでと同様に、この人物にカサノヴァの名を教え、今度は彼に「国王です」と伝えた。ここでカサノヴァは、一介の外国人である自分を国王に引き合わせるやり方が「実に安直だった」ことに驚いている。この夜カサノヴァは大いにしゃべり、国王は彼の話に聞き入って、帰るときに「いつでも宮廷へたずねてこい、喜んで会うから」と言ったという。20年も経ってからの回想であり、むしろカサノヴァの脚色も加わっていただろうが、この場面の描写には実感がこもっていてつい惹きつけられてしまう。

カサノヴァの、賭博を楽しみ、女性と社交し、自宅で食事はとらないという生活スタイルはペテルブルクでもワルシャワでも変わらないが、君



（左）スタニスワフ 2 世アウグスト、Marcello Bacciarelli 画、1764（右）ジャコモ・カサノヴァ、著名な画家である弟のフランチェスコ画、1750-55 頃

主との出会いは少し異なっていた。彼はペテルブルクでは知人のパニン伯爵の入れ知恵で、散歩中のエカチェリーナ 2 世(在位 1762-96)の前に登場する。この仕組まれた出会いの場で彼は女帝の尊大さを感じとり、プロシア王フリードリヒ 2 世を批判したり、女帝の趣味に自分の趣味を合わせたりと相手の自尊心を擽ることに余念がない。ポーランド国王との偶然の出会いや自然な会話と比べると、女帝との出会いはいかにも「謁見」といった印象を与える。

スタニスワフ・アウグストはまだ国王になっていなかった青年期にやはり帝位につく前のエカチェリーナ 2 世の愛顧を受け、彼が王位についた背景には彼女の支援もあったとされる。カサノヴァは当時のワルシャワに自立の歩みを進めようとする意気込みを感じつつも、エカチェリーナが「どういう主張もちだすかと目をこらして待っていた」と述べ、スタニスワフ・アウグストについても、ロシアの横暴に抵抗しない柔弱な国王と評したのだ。

とはいえカサノヴァは国王に好印象をもった。イタリア最員の国王は借金で苦しい生活を強いられていたカサノヴァにそっと金包みを渡し、それ以来カサノヴァは毎朝この「善良な」国王の衣裳室に出かけ、話し相手を務めることになった。

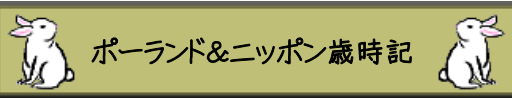
平穏だった彼のワルシャワ滞在は衝撃的な結末をもって幕を閉じる。ブラニツキという当時国王の寵臣だった男と決闘する羽目になり、カサノヴァは手を負傷したが、相手の傷はさらに重く、危うく一命を落とすところであった。この決闘はワルシャワ

中の知るところとなり、カサノヴァは敵方につけ狙われ、おまけに当時「国王の領土」の内では「決闘は死をもって禁じられて」いたので、この地を立ち退かざるを得なくなる。国王が国外逃亡を助けるため金銭的援助を行い、カサノヴァはワルシャワを出てドレスデンへと向かった。

カサノヴァのワルシャワ滞在記は彼の回想録の中でもひととき興味深い。というのも、強権のロシア君主エカチェリーナ 2 世の宮廷を間近に見た直後の訪問であったため、ポーランド国王の柔和な気質と協調的な執政の描写にはロシア女帝との対比が際立っているからである。二人の君主にはむしろ気質の相異があったが、それに加えて、武力によって帝位を奪取した君主と、その庇護のもと投票で選出された君主という境遇の違いもあった。カサノヴァといういかさま師、教養人、そして 18 世紀ヨーロッパのコスモポリタンの眼差しは、そうした二人の君主像を確実に捉え、ロシア帝国と濃密な関係にあった 18 世紀ワルシャワの風景を生き活きと描き出しているのである。



かなざわ みちこ 神戸市生まれ。東京大学・同大学院修了。東京大学助手、放送大学助教授をへて 1996～東京大学大学院教授(スラヴ語スラヴ文学)、2016～東京大学名誉教授、2000～01 ワルシャワ大学客員講師。編著書: 十八世紀ロシア文学の諸相 水声社、編訳書: 可愛い料理女: 十八世紀ロシア小説集 彩流社など。



大人の塗り絵

この二、三年、大人向けの塗り絵がちよつとした流行になっています。郵便局でも、スーパーでも、どこでも売っています。リラックス効果があるとのことで、私も嵌ってしまいました。

esy floresy うねうねと
 pojawiają się pączki 出てくる蕾
 kolorowanka 塗り絵かな
 Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

już po deszczyku 雨上がり
 poranek jasny pełen 澄み切る朝に
 głosu skowronka 雲雀鳴く
 Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョートル・ヴジェチョノ

ポーランド語シ・チュ・ジュが多い寒雀
 柳の芽ジブシー音楽旧市街
 都鳥今日はヴィスワの中洲にゐ
 岩見沢市、霜田千代磨